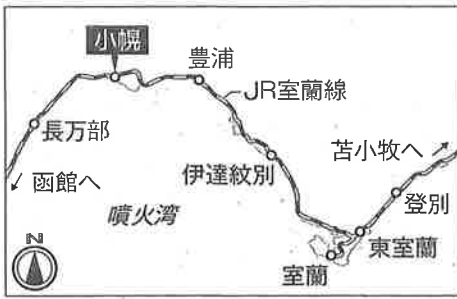


日本一の秘境駅 小幌 ①

「こんなに人が来ているんだ」。国道から2・5時間の林道を歩くこと約2時間。札幌市北区の中学1年生開発愛望さん(12)は、たどり着いたJR室蘭線小幌駅(胆振管内豊浦町)のホームを見て驚いた。

9月中旬の土曜日に行われた豊浦町主催のモニターツアー。札幌などから20人が参加した。目的地の小幌駅には10人以上の先客がおり、参加者に小幌人気の健在ぶりを印象づけた。



小幌駅は、鉄道のトンネルとトンネルに挟まれた約80分の谷間に、ホームがぼつんとある無人駅。周りに見えるのは山だけという独特の風景と、列車以外で行き着くのが難しいことから、「日本一の秘境駅」として多くの鉄道ファンを引きつけてきた。

だが、日常的に利用する住民はおらず、JR北海道は昨夏、廃止方針を豊浦町に伝えた。「秘境駅」の希少性を生かした観光振興を目指す町は、存続を強く要求。JRとの協議は計10回を数え、町が費用を全額負担して維持管理するという、条件つき存続にこぎ着けた。

駅の利用者数は、JRが昨年9月に示した過去5年間平均で1日当たり3・4人。それが、昨年の夏から秋にかけての週末は「廃止の前に」と駆け込み客が押し寄せ、時間帯によっては60人前後がホームにあふれ

豊浦

廃止一転町が維持管理

モニターツアーの参加者と一般客でにぎわう小幌駅のホーム=9月



小幌駅 1943年(昭和18年)に列車がすれ違つたための信号場として設置され、87年のJR北海道発足時に駅になった。当初から無人駅。普通列車が上り(長万部方面)は1日4便、下り(東室蘭方面)は同2便停車する。秘境駅訪問家の牛山隆信さんが主宰するインターネットサイト「秘境駅へ行こう!」などで知られるようになり、「秘境度」などを数値化した同サイトの2016年度ランキングで全国1位。

当面1年条件

ただ、先輩格の小幌駅も不安定な状態にある。豊浦町とJRが3月に結んだ協定で、駅の存続は4月から「当面1年間」とされ、その後は両者の協議による1年更新となった。町側は来年度以降も維持管理を続けたい考えだが、現段階でJR側から更新に関する協議の呼び掛けはない。

た。存続が決まり、一時の熱気は薄れたものの、今年

集める。JR北海道が鉄道の事業縮小の動きを強め、駅の維持に自治体の協力を求める中、小幌駅がいわば先行事例となったためだ。北海道運輸局によると、地元自治体が費用を全て負担して維持管理するJRの駅は、道内では現時点で小幌駅ただ一つという。

宗谷管内幌延町は8月、JRから宗谷線の下沼、南幌延、糖南の3駅を来年3月に廃止する方針を伝えられた。この際、小幌駅の事例も示されたという。3駅を「秘境駅」として観光資源にしたい同町は11月、駅を存続させるため、来年度の維持費を負担する道を選んだ。岩川実樹副町長(55)は「小幌駅を参考にしたい」と話す。

存続に向けた交渉を担当した豊浦町の小川英紀副町長(57)は「冬を含め、1年間しっかり管理できるかどうか見られているのだから」と話し、来年度の予算編成期を前に気がでない表情を浮かべた。

(伊達支局の綱島康之が担当し、3回連載します)

存続の先行例

にぎわいが続く小幌駅は今、別の観点からも注目を

た。存続が決まり、一時の熱気は薄れたものの、今年

集める。JR北海道が鉄道の事業縮小の動きを強め、駅の維持に自治体の協力を求める中、小幌駅がいわば先行事例となったためだ。北海道運輸局によると、地元自治体が費用を全て負担して維持管理するJRの駅は、道内では現時点で小幌駅ただ一つという。

発信

日本一の秘境駅 小幌

㊦

15日午後、胆振管内豊浦町のJR小幌駅。雪が降り積もるホームに、防寒着に反射ベストを着け、白いヘルメットをかぶった町職員2人が降り立った。

車で行けない「秘境駅」のため、役場近くの豊浦駅と普通列車で行き来する。帰りの列車が来るまでの約30分間、線路手前の遮断機や駅名の看板、警報機など20カ所を指し示しながら、丁寧にチェックした。

点検月に2回

小幌駅が豊浦町管理になった4月以降、町は毎月1日と15日の2回、駅の点検を行う。役場職員約130人のうち、水産商工振興課を中心とする職員7人が毎回2人交代で点検する。往復の乗車時間は約40分。小幌での滞在を含め、毎回70

小幌駅の時刻表

長万部行き	室蘭・東室蘭行き
8:38	
15:13	15:44(東)
17:39	19:46(室)
20:04	

(東)は東室蘭 (室)は室蘭

分ほど時間を取られる。

3月のダイヤ改正で、小幌駅に停車する普通列車は1日計8本から6本へ減った。午後3時44分発の東室蘭行きに乗り遅れると、次の列車が来るまで4時間余り待たなければならぬ。

同課の杉谷佳昭課長(51)は「月2回とはいえ、通常業務もある中で負担がないとはいえない。会議などが入って担当者の順番を代わってもらうこともある。しかし、重要な作業なので緊張感をもって当たりたい」と気を引き締める。

雪の積もったホームに降り立ち、看板や時刻表などの点検作業を行う豊浦町職員＝15日

豊浦



ヒトとカネ 負担じわり

年度の小幌駅の維持管理費として、町が470万円を予算計上する方針を伝えると、町議たちは一様に驚いた。JRが示していた維持管理費は年間約150万円。それと比べ、300万円以上も開きがあった。

町によると、費用が膨らんだのは、駅の点検と除雪の業務を指導するJRへの支払いと、繁忙期に配置する警備員の人件費がかさんだためだ。

駅の存続が決まったのは本年度だけで、その先はJRとの協議による1年更新。来年度以降も更新を重ねようとすれば、今後10年間でホームや放送設備などの改修費に、約1500万円かかるとの試算もJRから示されているという。

こうした経費は人口約4200人の町にとっては重

い負担だ。一般会計予算はおよそ50億円規模だが、高齢化によって多くは福祉関連予算などに充てられ、新たな政策予算を捻出するのは難しい。町は3月、ふるさと納税による寄付で資金を集めようと、「小幌応援基金」を創設した。

昨年度、「小幌駅存続のために」と町に集まった寄付金は942万円。しかし、本年度は11月末現在で192万円にとどまる。既に2年分の経費が確保できたとはいえず、これから小幌への関心が薄れることも予想される。心もとない財政事情の中、どう財源を確保し続けるかが課題だ。

冬場は、ホームや連絡通路に積もる雪の除去も大切になる。10日には今季初の除雪作業が行われた。JRが町内で雇った作業員9人が、隣の礼文駅と併せて除雪し、小幌駅分の経費約128万円を町が負担する形をとっている。労働力人口

が少なく、町とJR北海道がそれぞれ雇用すると、作業員の確保が難しくなるという。

管理費470万円

「そんなに費用がかかるのか」。今年2月の豊浦町議会全員協議会。2016

発信

日本一の秘境駅 小幌 ①

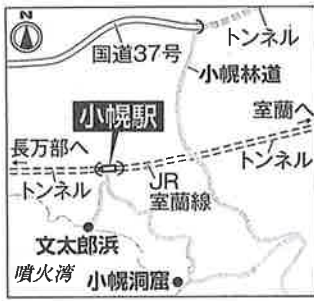
JR小幌駅（胆振管内豊浦町）から林道を歩いて20分ほど。噴火湾を望む海岸に、木の鳥居が据えられた洞窟がある。火山活動でできた断崖が、波によって浸食された小幌洞窟だ。

僧の田空が350年前、ここで5体の仏像を彫ったとされる。うち1体の「岩屋観音」は、3年前まで洞窟内に納められ、現在は伊達市の有珠善光寺で大切に保管されている。

駅周辺の見どころに詳しい豊浦町郷土研究会の小西重勝会長(77)は「小幌は断崖に沿って所々に現れる海岸が美しく、癒やされる。さらに岩屋観音のような、ここで紡がれてきた歴史もある」と魅力を説く。

1987年のJR北海道発足時から無人駅の小幌。旧国鉄の信号場だった60年代後半までは、単線の線路を列車が安全に行き交うための業務を担う職員がいた。漁を営む住人もおり、人々の生活が息づいていた。

小幌駅から南へまっすぐ下った「文太郎浜」。戦後、小幌で漁師をしていたアイヌ民族の陶文太郎さんの名前に由来する。2度の列車事故で両足を失いながら、不自由な体で漁を続け、家族を養い続けた。



9月に豊浦町が町内で開いた「秘境小幌フォーラム2016」。札幌市在住のノンフィクション作家渡辺

心に響く物語

一史さん(48)は陶文太郎さんについて語り、「小幌は非常に魅力的というか、心を揺さぶる物語がある」と力を込めた。

渡辺さんは、道内の無人駅周辺に住む人々の暮らしをルポした著書「北の無人駅から」(11年、北海道新聞社刊)で、「最もユニークな無人駅」として小幌を

豊浦町企画のツアーで小幌洞窟に入る参加者。鳥居の向こうには海岸が見える＝昨年10月



神秘性と集客 両立狙う

豊浦町が、維持管理費を負担してまで駅を存続させる道を選んだのは、「秘境駅」を核とした観光振興の発展に、町の未来を託したからだ。しかし、駅への観光客の呼び込みを力を入れれば入れるほど、最大の魅力である「神秘性」を失うジレンマを抱える。

新ルート発掘

そこで町が描くのは、小幌駅ばかりに焦点を当てず、町内の他の観光資源と結びつける戦略だ。昨年10月、町が企画し、大手旅行会社が主催した札幌発着のバスツアー。秋サケの遡上を観察するインディアン水車公園、国内外の珍しい貝を展示した旧中学校校舎、地場の野菜や魚介類を売る道の駅。小幌駅を中心に周辺観光を楽しむツアーは、参加者40人の好評を

得た。

今年1～11月には、町内の漁港で名物のホタテ料理を味わい、温泉施設の敷地内で雪中キャンプを行う多彩なモニターツアーを試みた。船で海上から小幌を訪れるツアーも検討中だ。

農漁業が主産業の小さな町にとって、町内で唯一「日本一」を名乗れる小幌駅の重要性は、これからも変わらない。

駅の維持管理費の捻出と、新たな観光ルートの掘り起こし。二つの宿題を背負う村井洋一町長(66)は、固い決意を示すように言った。「駅周辺の自然景観を壊さないよう、神秘性を守りながら、豊浦町全体の活性化につなげたい」

発信